

アフリカの声

●丹 埜 靖 子

(元 アジア経済研究所主幹)

アフリカの文化の中では、美術工芸はヨーロッパ大航海の時代から世界に知られ、また音楽も現代音楽に大きなインパクトを与えてきた。近ごろは日本にいてアフリカの音楽や美術に接する機会にも恵まれるようになった。アフリカと日本の人の交流も、ゆっくりではあるが進んでいて、芸能人やスポーツ選手も日本で活躍している。

とはいえ、普通のアフリカ人がどんなことを考えているのかを知るには、やはり現地の文字情報を通してがいちばんだ。ところがアフリカに関する情報でも研究でも、文字の形で出版されたものの中でわれわれの目にするのは、当のアフリカから出てきたものは数が少なく、片隅にひっそりしている感がある。

これは考えてみれば、おかしい。もっとアフリカ人の感性に触れたい、生の声を聞きたい、というフラストレーションがある。アフリカには作家や研究者が少ないのか。そんなことはない。りっぱな大学もたくさんある。人材にはこと欠かない。興味深い話題も豊富である。アフリカの出版物が少ない背景には、アフリカの伝統文化が文字ではなく、語り、うた、おどり、など、肉体表現に最高の価値をおいてきたこと、また多言語社会という事情もある。

アフリカの人にもっと書いてもらうにはどうしたらよいか。本を作る紙や印刷機の不足、コスト高は結果であり、大もとには本を出しても買い手が少ないことがあるだろう。識字率が低く読書人口が小さい、また生活優先の家計の事情で、子供の教科書で手一杯、本は売れない。外国に売ろうにも、流通が問題である。コンピュータも普及していない。

子供も大人もみな字が読めるようになり、本が安く手に入り、図書館でも読めるようになれば、アフリカの本はどんどん国内で流通し、外国の読者にも届くようになるだろう。旧宗主国ドナーはある程度この分野でサポートしているようだが、まだまだだ。日本にとってもアフリカは小さな存在だった。人類のゆりかご、世界の20%の土地とそれに近い人口をもつ文化を、われわれはもっともっと注目し、評価すべきだ。

21世紀は人材が資源の時代、古く若いアフリカは未来世代のホープである。アフリカ諸国の若い芽がどんどん伸びて、情報発信の手段が備われば、アフリカは期待に応えてくれるだろう。アフリカ人も世界も、アフリカの声を待っている。グローバルシステムに対してモノをいい、さらに新しい価値体系作りに貢献する声が待たれている。アフリカ人は、言語に関してもまた、非常に国際的なのだから。